

(他の巨峰群、欧米雑種にも応用できます。)

ブドウ (種なし・種あり 巨峰・ピオーネ・藤稔)

令和4年 果樹病虫害防除暦

回数	散布時期	病虫害の発生状況	薬剤と調合量 (100ℓあたり)	散布量 (10aあたり)	注意事項	作業メモ
晩腐病対策として果梗の切り残し・まきひげの除去、カイガラムシ類には粗皮はぎを徹底する。サビダニ類対策として、石灰硫黄合剤20倍(5ℓ)を用いる(展着剤…別表)						
①	発芽前 (3月中旬～4月上旬)	越冬病菌、害虫 黒とう病 つる割病 晩腐病 ブドウハモグリダニ	ベンレート T 水和剤20倍 500g またはベンレート水和剤 200倍 500g 展着剤 別表	300ℓ	①ブドウトラカミキリの秋防除を行わなかった場合は、2月下旬にトラカミキリ防除剤を散布する。 ②ベンレート T 水和剤20は単用散布とし、石灰硫黄合剤を2週間前までに散布する。 ③ベンレート水和剤は、石灰硫黄合剤と混用してもよい。その場合は、ベンレート水和剤を先に水に溶かしてから石灰硫黄合剤を加用する。 ④ベンレート T 水和剤20・ベンレート水和剤にかえて、 トップジン M ベース3倍液を塗布してもよい。 ⑤石灰硫黄合剤の散布ができない地域では、ブドウハモグリダニ対策として、展葉初期にコテツフロアブル2,000倍(50cc)を散布する。	
②	展葉5～6枚 (4月下旬～5月上旬)	べと病、黒とう病が発生し始める。 チャノキイロアザミウマ、フタテンヒメヨコバイが発生する。	ドーシャスフロアブル 2,000倍 50cc ③ 注意事項②参照 加用スカウトフロアブル 3,000倍 33cc	300	①べと病防除の最も重要な時期であるから、散布開始が遅れないようにする。 ② アウトウ・ウメの隣接園ではドーシャスフロアブルにかえて、アリエッティ水和剤800倍(125g)を用いる。 ③天候不順が予想される場合やべと病の発病初期には、オロンディスウルトラ SC2,000倍(50cc)をかけむらのないようていねいに散布する。 ④ オロンディスウルトラ SC は、周辺に立木類がある場合は飛散しないように注意する。耐性菌の発生を防ぐため、連用をさけ、年1回の使用とする。	
べと病対策として、散布量を守り、散布間隔をあけないようにする。						
③	展葉9～10枚 (5月上旬～5月中旬)	べと病、黒とう病、クワコナカイガラムシ、チャノキイロアザミウマ、アブラムシ類、フタテンヒメヨコバイの発生期。	オーソサイド水和剤80倍 125g 加用モスピラン顆粒水溶剤 2,000倍 50g	300	① オーソサイド水和剤80は、キウイフルーツの隣接園では飛散に注意する。 また、スモモに被害の発生するおそれがあるので、隣接園では飛散に注意する。使用回数(計3回まで)に注意し、 収穫30日前 までに用いる。 ②天候不順が予想される場合やべと病の発病初期には、ジャストフィットフロアブル 5,000倍(20cc)をかけむらのないようていねいに散布する。 ③ ジャストフィットフロアブルは、周辺に立木類がある場合は飛散しないように注意する。耐性菌の発生を防ぐため、連用をさけ、年1回の使用とする。 ④前年晩腐病・灰色かび病の発生が多かった園では、フルーツセイバーにかえて、スイッチ顆粒水和剤2,000倍(50g)を用いる。ただし、アウトウに被害の発生するおそれがあるので、隣接園では飛散に注意する。灰色かび病対策として、花かすをできる限りていねいに取り除く。 ⑤クワコナカイガラムシの多い場合は、スプラサイド水和剤1,500倍(66g)または、スタークル顆粒水溶剤2,000倍(50g)を用いる。ただし、スプラサイド水和剤は、立木類に被害の発生するおそれがあるので飛散に注意する。 ⑥ミカンキイロアザミウマの多い園では除草を徹底し、開花直前にアデントフロアブル2,000倍(50cc)を用いる。 ただし、キウイフルーツの隣接園では飛散に注意する。 ⑦ハダニ類には、カネマイトフロアブル 1,500倍(66cc)を追加散布する。 ただし、カキ、キウイフルーツの隣接園では飛散に注意する。 ⑧晩腐病・灰色かび病などの追加散布として、セイビアフロアブル20 2,000倍(50cc)を用いてもよい。	
④	開花直前 (5月中旬～5月下旬)	べと病、灰色かび病、黒とう病、うどんこ病、クワコナカイガラムシ、チャノキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマの発生期。	オーソサイド水和剤80倍 125g 加用フルーツセイバー 1,500倍 66cc またはスイッチ顆粒水和剤 2,000倍 50g	300		
種なし栽培：第1回ジベレリン処理(晩腐病対策として、処理後直ちに口ウ引きのカサかけを行う。)						
⑤	落花直後 (5月下旬～6月上旬)	べと病、灰色かび病、黒とう病、うどんこ病の発生が多くなる。 晩腐病の感染期。 クワコナカイガラムシ、チャノキイロアザミウマ、ハダニ類、ブドウサビダニの発生期。ハマキムシ類、トリバ類、クビアスカシバの発生が始まる。	ジマンダイセン水和剤 1,000倍 100g またはベンコゼブ水和剤 1,000倍 100g 加用コルト顆粒水和剤 3,000倍 33g	300		
うどんこ病対策として、トリフミン水和剤 3,000倍(33g)を用いる。						
⑥	小豆大 (6月上旬～6月中旬)	晩腐病の感染期。 べと病、黒とう病、うどんこ病、トリバ類、クビアスカシバの発生期。	ベンコゼブ水和剤 1,000倍 100g またはジマンダイセン水和剤 1,000倍 100g 加用テッパン液剤 10,000倍 10g	300	①この時期の散布が遅れると、果粉の溶脱・果粒の汚染が心配されるので注意する。 ②落花後のチャノキイロアザミウマ防除から散布間隔をあけないようにし、散布後袋かけを早く行う。 ③チャノキイロアザミウマは袋内にも進入するので、トメ金もしっかり固定する。 ④ハマキムシ類などの追加散布として、スカウトフロアブル 2,000倍(50cc)を用いてもよい。 ⑤うどんこ病、灰色かび病などの追加散布として、オンリーワンフロアブル 2,000倍(50cc)を用いてもよい。	
種なし栽培：第2回ジベレリン処理						

回数	散布時期	病虫害の発生状況	薬剤と調合量 (100ℓあたり)	散布量 (10aあたり)	注意事項	作業メモ
晩腐病・灰色かび病対策として、カサ・袋かけは早く行う。また、天候不順やカサ・袋かけが遅れる場合は、セイビアフロアブル20 2,000倍(50cc)を用いてもよい。 ただし、小豆大以降の散布は果粉の溶脱・果粒の汚染が心配されるので注意する。チャノキイロアザミウマ対策として、袋かけが遅れる場合や、前年発生が多かった園ではアドマイヤーフロアブル 5,000倍(20cc)を追加散布する。						
⑦	袋かけ直後 (6月中旬～6月下旬)	べと病の多発期。 晩腐病の感染期。 クビアスカシバの多発期。 ブドウサビダニ、チャノキイロアザミウマの発生期。	IC ボルドー 66D 40倍 2.5kg または 4-4式ボルドー液 (硫酸銅400g・生石灰400g) 加用コロマイト水溶剤 2,000倍 50g	400ℓ		
クビアスカシバ対策として、サムコルフロアブル10 5,000倍(20cc)をカサかけ・袋かけ後に散布する。周囲にデラウェアや立木類(カキを除く)がない場合は、パダン SG 水溶剤1,500倍(66g)を用いてもよい。主枝・亜主枝もていねいに散布する。						
⑧	7月上旬～7月中旬	べと病の発生期。 さび病の感染期。 チャノキイロアザミウマ、クビアスカシバの多発期。 クワコナカイガラムシの発生期。	種なし栽培 ICボルドー 66D 40倍 2.5kg または 4-4式ボルドー液 (硫酸銅400g・生石灰400g) 加用モスピラン顆粒水溶剤 2,000倍 50g (収穫14日前までに散布)	400		
⑨	除袋前 (7月中旬～7月下旬)	べと病、さび病の発生が続く。 晩腐病、灰色かび病の発生期。 チャノキイロアザミウマの多発期。 クビアスカシバの発生が続く。	— ICボルドー 66D 40倍 2.5kg または 4-4式ボルドー液 (硫酸銅400g・生石灰400g) 加用モスピラン顆粒水溶剤 2,000倍 50g (収穫14日前までに散布)	400		
⑨	8月上旬～8月中旬		— (棚上散布) ディアナWDG 10,000倍 10cc 展着剤 別表	400		
⑩	収穫直後 (9月上旬～9月中旬)	べと病、さび病の発生が続く。 ブドウトラカミキリの産卵期。	ICボルドー 66D 40倍 2.5kg または 4-4式ボルドー液 (硫酸銅400g・生石灰400g) 加用 スミチオン水和剤40 1,000倍 100g	400		スミチオン水和剤40は、カキ、リンゴ、キウイフルーツの隣接園では飛散に注意する。
⑪	10月下旬～11月上旬	ブドウトラカミキリの幼虫期。	トラサイドA乳剤 200倍 500cc またはラビキラー乳剤 200倍 500cc 浸透性展着剤 別表	300		①隣接園に収穫前の果樹がある場合は飛散に注意する。 ②住宅隣接園では、トラカミキリ防除剤にかえてモスピラン顆粒水溶剤2,000倍(50g)を10月中旬までに用いてもよい。 ③古づるや新梢によくかかるように散布する。